

令和元年6月4日現在

機関番号：16101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13230

研究課題名（和文）コホート系列法による若年層方言の動態研究

研究課題名（英文）Survey of dynamic youth dialects by the cohort series method

研究代表者

村上 敬一（MURAKAMI, Keiichi）

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）・教授

研究者番号：10305401

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「コホート系列法」と言われる言語調査法によって若年層方言の動態を解明し、日本人の言語形成期最終盤から終了直後における、言語変化モデルの構築を目的としたものである。

具体的には、徳島県内の2つの高校、5つの中学、熊本県内の1つの高校を調査対象とし、語彙や文法における伝統方言の使用、標準語使用、関西方言の使用、また、それぞれの使い分けの実態を明らかにし、若年層の言語形成期における言語変化の普遍的なモデルの構築を図った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究のように、若年層における短期間の「進行中の言語変化」を縦断的に継続して解明しようとする研究は、これまでの日本の方言学、社会言語学において類を見ないものであった。若年層の言語接触状況や言語環境の変化と言語形成に関わるメカニズム、因果関係が解明されたと考える。

徳島県、熊本県の若年層方言は、標準語、関西方言、地域共通語、伝統的方言からなる「多重性」をもって形成されている。この「多重性」は、言語形成期における若年層の言語習得の様相が具体的に現れたものであり、若年層の言語教育、言語獲得についても資する研究結果が得られたと考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the dynamics of the young generation dialect by the "cohort series method" and to construct a language change model immediately after the end of the language development period of the Japanese language.

Specifically, two high schools in Tokushima prefecture, five junior high schools, and one high school in Kumamoto prefecture are surveyed, and use of traditional dialects in vocabulary and grammar, use of standard words, use of Kansai dialects, and different use of each To clarify the actual situation of the language and to construct a universal model of language change during the language formation period of the younger generation.

研究分野：日本語学

キーワード：地域方言 若年層方言 コホート系列法 徳島方言 熊本方言 方言学 地域言語学 社会言語学

1. 研究開始当初の背景

国立国語研究所などの「定点経年調査」には、二つの調査手法が用いられる。インフォーマントに対して面接調査やアンケート調査を実施する横断的手法 (cross-sectional method) と、同じインフォーマントに対して、同じ調査方法で、同じ調査項目を繰り返し調査する縦断的手法 (longitudinal method) である。後者は「パネル調査」とも呼ばれる。横断的手法によって同年齢の集団に対する調査を実施したのち、その集団に対して縦断的手法による調査を実施するのがコホート系列法 (cohort sequential method) である。横断的手法で同年齢の集団 (コホート) の一般的傾向を明らかにするとともに、縦断的手法でその因果関係を明らかにすることができる。

申請者は、国語研究所の代表的な定点経年調査である「岡崎調査」「鶴岡調査」の両方に関わる中で、コホート系列法を用いた調査手法を、若年層方言の動態研究に適用することを模索してきた。若年層における言語習得、言語接触、言語変化の様相を、横断的研究と縦断的研究を組み合わせて解明しようとする研究である。

2. 研究の目的

本研究は「コホート系列法」によって若年層方言の動態を解明し、日本人の言語形成期最終盤から終了直後における、言語変化モデルの構築を目的とする。四国、九州の中高生を対象として、進学や就職などによって言語をとりまく環境が大きく変動する、この世代特有の活発な言語変化のプロセスとメカニズムを「コホート系列法」を用いた言語調査によって継続的に追究し、データによって実証された言語変化のモデル化を図るものである。

3. 研究の方法

徳島県内の2つの高校、5つの中学、熊本県内の1つの高校を調査対象とし、語彙や文法における伝統方言の使用、標準語使用、関西方言の使用、また、それぞれの使い分けの実態を明らかにし、若年層の言語形成期における言語変化の普遍的なモデルの構築を目指すものである。

2016年度から2018年度は、吉野川市立山川中学校、美馬市立岩倉中学校、三好市立井川中学校、徳島県立脇町高校、同池田高校の3年生を対象とした、アンケートと面接による「横断的調査」を実施した。2018年度は新たに、つるぎ町立貞光中学校、美馬市立美馬中学校も、対象とした。

2017、18年度には、両中学校から徳島県立脇町高校と同池田高校に進学した生徒を対象に、高校2年生までの2年間にわたる面接による「縦断的研究 (パネル調査)」を実施する。高校生も同様の「横断的調査」を実施するとともに、進学等で首都圏や関西圏に移住した生徒を対象に「縦断的調査」を実施する。

4. 研究成果

本研究のように、若年層における短期間の「進行中の言語変化」をコホート系列法によって縦断的に継続して解明しようとする研究は、これまでの日本の方言学、社会言語学において類を見ないものである。本研究によって、若年層の言語接触状況や言語環境の変化と言語形成に関わる、さまざまなメカニズム、因果関係が解明されたと考える。

例えば、徳島県の若年層方言では、中学生では伝統的方言が使用されるが、高校生では関西方言へと置き換わる実態が明らかになった。例えば、図1のような、言い切り形 (断定辞「だ・じゃ・や」) の例である。中学生の「だ」「じゃ」使用は減少し、関西方言である「や」の使用が増加していることがわかる。

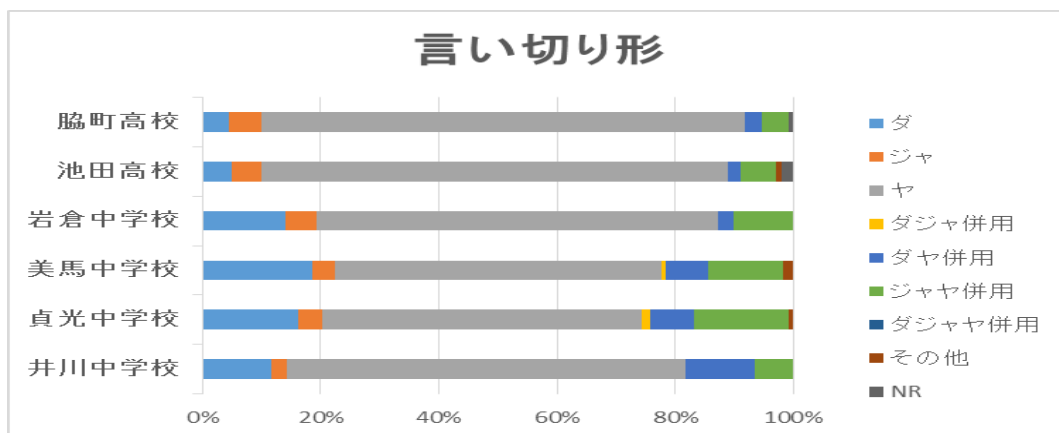


図1 徳島県中高生の断定辞 (2018年調査)

また、図2のように「否定辞過去」では、伝統的方言形の「みんなだ」や関西方言形の「みーへんかった」は、高校生では西日本方言形の「みんなかった」に交替する様相が見られる。

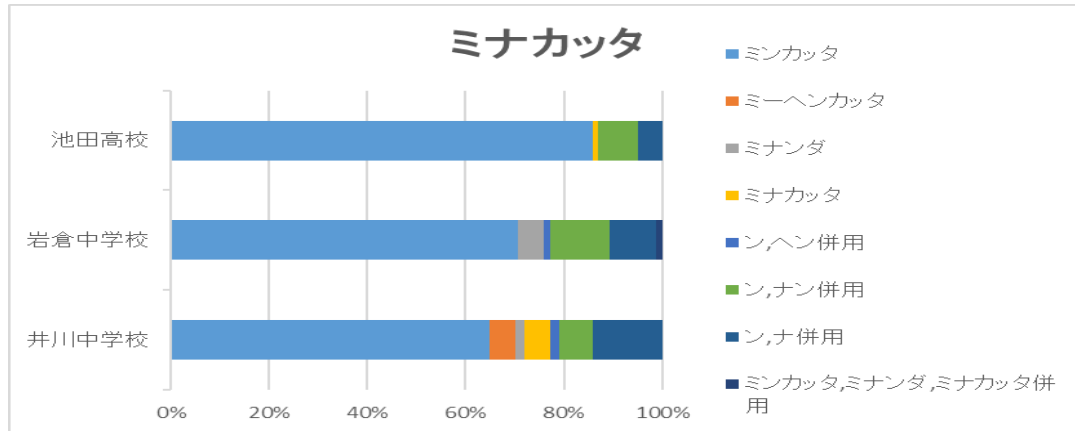


図2 徳島県中高生の否定辞過去

また、熊本県の天草高校では、高校1年生から2年生にかけて、熊本方言から西日本方言に変化する様相が見られた。例えば、図3のような「よまれん」から「よめん」への変化である。

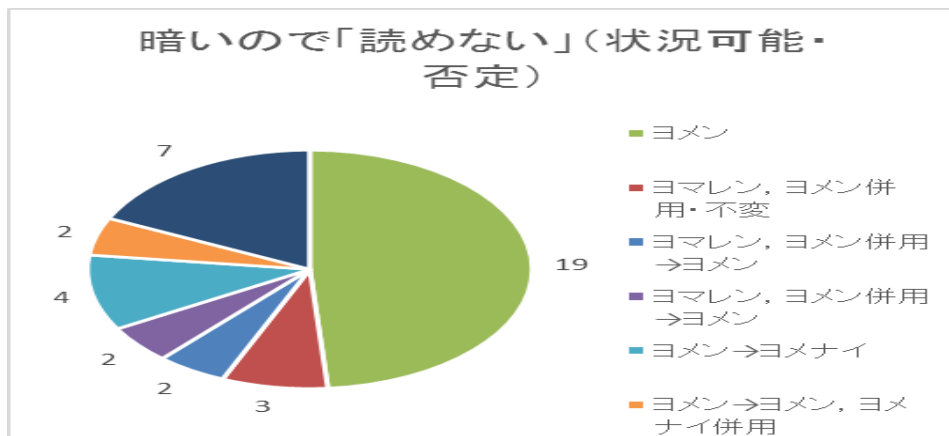


図3 天草高校生の可能表現

さらに、敬語の獲得についても、図4のように1年生では少なかった「いらっしゃいますか」が、2年生では増加することもわかった。

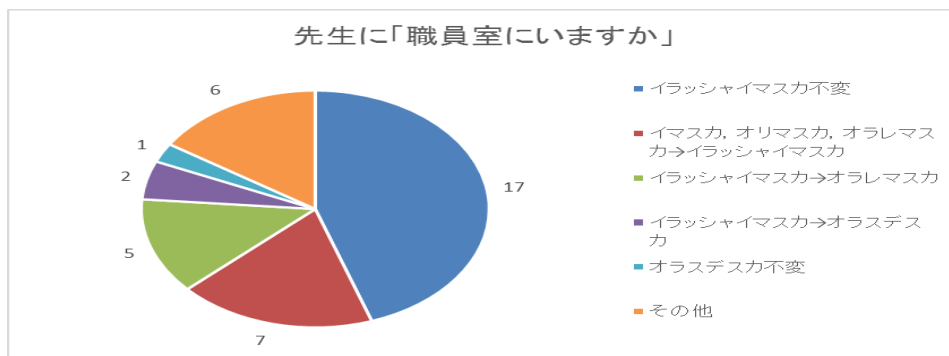


図4 天草高校生の敬語

以上、一部の調査結果ではあるが、標準語、関西方言、地域共通語、伝統的方言からなる「多重性」をもって形成されている徳島県、熊本県の若年層方言であるが、今回の調査結果から、この「多重性」は、言語形成期における若年層の言語習得の様相が具体的に現れたものであることが実証されたといえる。言語環境の変化と地域差、世代差の関係など「接触方言学」の一類型として、本研究が寄与するところも少なくないと思う。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計5件)

村上敬一(2018)「災害時における地域方言をめぐって」韓国日本語学会第37回春季学術研究会

村上敬一(2017)「災害時を想定した実践方言研究の試み」第1回実践方言研究会

村上敬一(2017)「イノベーションの観点から見た日本の言語教育」2017 全球化創新経営管理国際研討会(台湾)

村上敬一(2017)「コホート系列法による地域方言研究と社会活動の実践」育達科技大学2017年応用日語學術研討會(台湾)

村上敬一, 田島幹大, 吉平綾加(2017)「地域方言を題材とした高大連携による教育活動の実践」第104回日本方言研究会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。